

やすらぎ



「歎異抄」(第三十八回)

そつらえ。

樫 暁 講述

(真宗聖典六三六頁)

「歎異抄」第十五章 続き
おおよそ、今生においては、煩惱障を断ぜんこと、きわめてありがたきあいだ、真言・法華を行ずる浄侶、なおもて順次生のさとりをいのる。いかにいわんや、戒行惠解ともになしといえども、弥陀の願船に乗じて、生死の苦海をわたり、報土のきしにつきぬるものならば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらわれて、尽十方の無碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益せんときにこそ、さとりにてはそうらえ。この身をもつてさとりをひらくとそうなるひとは、釈尊のごとく、種種の応化の身をも現じ、三十二相・八十随形好をも具足して、説法利益そうろうにや。これをこそ、今生にさとりをひらく本とはもうし

『仏説觀無量壽經』に登場する凡夫は、韋提希夫人を代表とする善なる凡夫と、かたや、阿闍世を代表とする悪なる凡夫である。しかし双方ともに凡夫にはちがいない。阿闍世如来の本願は、善人だ、悪人だといつて分け隔てをされない。これを不簡善惡の法という。

人間のいのちあるあいだというのは、欲望や怒り、罪の意識を断つということは、まったく困難なことであるため、真言や法華に代表される行者ですら、次の生でさとりを開くことを祈るのである。

まして我々のように、戒律を保つこともできず、行も行じられない、また、さとりを正しく理解することができないものにはなおさら困難なことである。

光照寺寺報

発行所
真宗大谷派 弘興山
宗教法人光照寺
〒331-0821
さいたま市北區別所町102-2
電話：048-651-2781(代)
FAX：048-651-2753
E-mail
yasuragi@beige.ocn.ne.jp
ホームページ
http://www8.ocn.ne.jp/~koshoji
発行人 池田孝郎

本願を唯一の依り処として、本願の船に乗って迷いの世界から浄土に到着するならば、黒雲のように覆う煩惱が晴れ、月明かりのように真実が輝き、阿闍世の光とひとつになって、すべての人を救うというご利益をあらわすことができるようになったときにこそ、さとりだと云えるであらう。

現実の我が身がここにある間に、即身成仏や六根清浄というさとりをひらくというようなことを云っている人は、これは、釈尊のように人を導くために様々な変化をして、普通の人間とは違った姿になったり、釈尊のように同様に説法をして、人々を教化しておられるのだろうか。

この世でさとりをひらくということとは、このような基準を満たしてこそ云えるのではないだろうか。我々は信心を賜うことはできたとしても、さとりをひらいたと云うわけに

はいかない。
さとりをひらくと云っている人も実際は凡夫であり、釈尊とは違うのだということを云われている。
この章では、いくら信心を得たからといって、さとりをひらいたと云われるのは大間違いなのだ、自身に気が付かせていただくことである。

(当寺)ご法話抜粋要約、文責副住職 釈徹照 次回へ続く



子供会はなまつり



誕生仏に甘茶かけ

孟蘭盆会法要 八月十一日(日) 厳修
子供会報告
推進員後期修了者感想

厳修

詳細は三頁

詳細は三頁

詳細は四頁

無碍光

一凡夫が仏になる法一

住職 池田 孝郎

今回は「生」について考えてみたい。何故ならば、「往生」の「生」に注目したいからです。
浄土真宗の教えの究極は「今生に往生が定まり、当来滅度」と頂く。「今生」は、人間としてこの世に生を享け、今、現に生きている身の事実です。「今生」の背景には、「過去世」を暗示します。自分はどこから来たのだろうと思う未生以前の世界です。又、「今生」の言葉の持つ背景に、「未来世」を暗示します。
この「過去」、「現在」、「未来」の三世観を憶う者こそ、人間の人間たる所以でありましょう。

幼い子が母に、「自分はどこから生まれて来たの」と尋ねるその素朴な問いこそ大事な問いであることです。又、人間は、「死んだらどうなるのであろうか」ともフト感じる存在でもあるのです。

若い人が自分探しをするのも、個としての自分を意識する成長の現れです。若い人だけが自分探しをしているわけではありません。老いも若きも、意識・無意識に自分探しをしておるのです。

自分探しの奥底には、「本当の自分」に出遇いたい願望が秘められています。この問いを発するところに自我の目覚めがあります。

そして、その自我を確立したいと思う心が、「自己実現」と歩ませるのでしよう。

今から三十年前位の日本経済新聞社が、定年退職した人を対象として行なったアンケートに、「あなたのして来た仕事に、あなたの能力を生かすことが出来たか」と聞いたところ、本当に生かすことが出来たと答えた人はほんの僅かで、多くの人が、「ほかに自分には能力があったのではないか」と答えられている記事が印象的に脳裏にあります。「本当の自分とは」、「本当の能力を発揮して、自分を生かしきれた」と

言い切れる使命感の達成を示している様にも思えます。このことから憶えば、人間は、使命感に燃え、自己を達成し、社会に貢献出来たと憶える世界を、意識・無意識に持っているのでしょうか。

「この世に何をしに来たのか」の根本的命題をだれしもが持っているのでしょうか。その命題を求めて人間は生きているのでしょうか。

この根本的命題を悟られた方が、お釈迦様であると頂きました。

お釈迦様は、兜率天よりマヤ夫人の母胎に降り、右脇より生じて現じて七歩を行じ、「吾当に世において無上尊となるべし」と告げられ、後に、老・病・死を見て世の非常を悟り、勤苦六年苦行され、山を降り、菩提樹の下で魔を下し悟られた。そしてその説くに説けない法を説かれ、八十年の生涯を遂げられて涅槃される。これこそ人間の「生まれた意味」と、「生きる意義」を体現して下さったと頂くことです。私は、全ての人々が、根本的命題を背負い生まれ、そして、生き、そして、根源の世界に帰り生まれて行く、浄土の仏菩薩の化身と頂きます。そして、未来際を尽して、苦しむ者あらん限りは衆生救済に娑婆界へ還来されている応化身の方々と頂きます。

南無阿弥陀仏

真の依り処

いろんな場で取りざたされています「いじめ体罰問題」ですが、どうしたら良いのか混乱に入るばかりですね。過去に大事に大切に教えられた謙虚なお蔭様と感謝のありがとう等身に付けないと自己主張は止まらないのではないのでしょうか。勝つ事だけが素晴らしいのではなく、負けた事によって必ず何か他人にはない尊いものを獲ることが出来るのです。それは人間一人一人がこの世では大切な存在であり、貴方一人が尊いのであると佛が語っておられます。傷ついて辛い悲しみを乗り越えてこそ我を知らされ、すべての者を平等に慈しんで下さっておられます佛に感謝です。又、日一日と同じものがなくすべてのものが諸行無常に変わって行くものと深く感じ取り受けとめ、常に真念誠実真心に歩みたいものです。合掌

岡田ノリ子

鈴の音

信心というものは若返るものである。
死ぬ準備ではない

安田 理深

(「信仰についての対話」)

お盆



お盆は日本の文化とも云える定着した仏教行事です。

お盆の期間を日々の忙しさから開放され、故郷に帰省して生きる意欲を回復する休息としてとらえるのも良いでしょうが、いのちの意味を尋ね、根源から生きる力を得る期間としてとらえたいかがでしょうか。

一口に仏教と云っても、たくさん宗派があり、教義が違いますがゆえに、お盆の儀式や捉え方が様々です。

「真宗は簡単でいいですね」とい

うことを耳にしたりします。

真宗は簡単というのは、お盆の飾りにおいて手間が無いということと仰ります。問題は手間がかからないことではなくて、亡き人を「諸仏」として仰ぎ、「自己のいのちの目覚め」が要の問題となります。

阿弥陀さんは一切を救うと誓っています。「本当にそうなのか」信じれない（難信）。この「難信」の問題がごろの根っこにあります。亡き人を偲び、お盆法要を通して、阿弥陀さんのお心を感じていければと思います。

お盆法要は二部制にて厳修致します。多数のご参詣をお待ちしております。

(副住職 釈 徹照)

盂蘭盆会法要

- ・8月11日(日)
- 第一部(午前) 9時30分受付
午前10時～11時30分まで
- 第二部(午後) 1時受付
午後1時30分～3時30分まで
- ・光照寺本堂にて
- ・勤行・法話

※準備の都合上、出席人数と午前か午後の参詣をご連絡下さい。
預骨、初盆の方は率先してお参り下さい。
また、どなたでもお参りできます。
真宗のお盆に触れて下さい。ご参詣をお待ちします。

お盆参り

- ・7月13日から16日の期間
- ・8月1日から16日の期間
(11日は除く)

※ご希望の日にちをお知らせ下さい。
時間につきましては、こちらで調整して連絡させて頂きます。
ご自宅か当寺のいずれかで読経いたします。

子供会「ポニークラブ」報告

花まつり&丸山公園外あそび

坊守 池田 邦子

四月一日(月) 此の度、当寺に

お釈迦さまの誕生仏をお迎えしました。本堂に花御堂を荘厳し、参加者一人一人誕生仏に甘茶をかけてお祝いしました。勤行、陽子さまのお釈迦さまの誕生後、丸山

桜花爛漫の下にて



陽子さんのお話



の由さまのの、丸山

公園へ移動、満開の桜の下でのお弁当タイム、ソフトボール、遊具あそび、一日たつぷりかけまわり楽しく過ごしました。
次回、八月二十日(火) お寺にてバーベキューを致します。



甘茶かけ

紙しばい

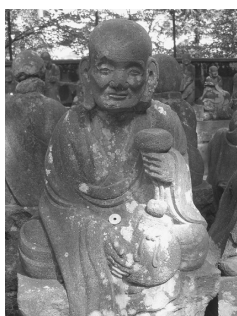


ひとくち 歎異抄

羅漢：浄土の慈悲とは如何に。

「念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもって、おもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり。」

第四章



「念仏成仏これ真宗」、凡夫が念仏申すところに既に、如来ましましき。

川越喜多院の五百羅漢

推進員後期教習を終えて

川澄 英明



左から平山氏、谷口氏、中岡師、川澄氏、藤原氏

久しぶりの京都行きでした。東京教区前期教習を昨年光昭寺からひとり受講し、後期教習を都合で受けられなかった私は、一年ずれ込んでしまいました。今年は谷口、平山、藤原の三氏と一緒に、大変心強い思いで京都に向いました。

受講に先立ち、気を引き締めようと以前立ち寄った御影堂門の対面にあるお店で気に入ったお数珠を手に入れることが出来ました。

教習は三日間びっしりとプログラムが組まれていましたが、僅かの休憩時間には、いつも同じ顔ぶれの五名ほどが喫煙室に出会い、教導の中岡明秀師（北海道教区）を交えて沢山の会話が出来たことはとても楽しいことであります。

印象に残った法話は「親鸞聖人を持って」というお話で、自分の心の中にいつも聖人が居るといふ感覚を持つことがたいせつだというお話でした。私の場合は阿弥陀如来がいっぱいしゃべっているのですが、これは聖人の教えだから、これでもいいのかなと思っています。

合掌

谷口 正司

今年三月に前期教習として「真宗入門講座・自分を生きる」(真宗会館)を、四月に後期教習として「推進員後期教習」(真宗本廟の同朋会館)を受講しました。

前期教習には、色々な理由で参加されているようでしたが、私と同様にお寺からの誘いという方も多かったように思います。

前期教習の近田昭夫先生(東京教区)の講座では、「毎日、勤行するにこしたことはないけれど、目覚め

たとき『南無阿弥陀仏、お早うございます』と念仏し、寝る直前に『南無阿弥陀仏、お休みなさい』と念仏しなさい。」が印象に残っています。

後期教習では、蓮如上人御影道中の御下向式が行われ、運良く拝見することができました。また、ご住職に法名を戴き、御影堂にて帰敬式を受けて参りました。

私たちの班の宣誓文の作成では、教導の中岡明秀先生(北海道教区)の講義に出てきた言葉を中心にして比較的短時間で作成でき、川澄さんの清書により、大変立派な宣誓文になりました。私たちの宣誓文は、以下の通りです。

宣誓

私たちは「南無阿弥陀仏」と念仏申し、聞法する生活がすべてで、思いで、親鸞聖人の教えを尋ねて参ります。「宗祖をもつ」ことを信条として先導的役割をはたしてゆくことを、ここに誓います。今後は、生活の中で念仏と、積極的に聞法会に参加するなど、今後も精進して参りたいと思います。

後期教習後は大谷祖廟にお参りし、開化堂の茶筒を土産に、京都を後にしました。

合掌

平山 正三

真宗入門講座推進員教習に今回ご縁があり参加させて頂きました。

前期教習は東京真宗会館にて二月二十七日(三月一日)の二泊三日で参加者三十名(内光昭寺三名)、講師は近田昭夫先生(東京七組顯真寺前住職)で「二日一回御内仏、一月一回聞法、一年一回報恩講、念仏申す生活」等のお話を頂きました。

後期は真宗本廟同朋会館(京都)にて四月十六日(十八日)の二泊三日東京教区推進員後期教習奉仕団として二十二名(内スタッフ六名)が参加(内光昭寺四名)、教導は中岡明秀先生(北海道敬徳寺住職)、輔導大橋氏(三重教区)・橘氏(山形教区)のもとカリキュラムに従い、三回の講義と座談(二班に分かれて、夕時勤行、晨朝参拝、そのほか帰敬式(他の奉仕団を含め総勢三十数名)・法名伝達式の参列、清掃奉仕(御影堂の畳拭き)、諸殿拝観と目一杯のスケジュールの三日間で、一番大変だったのは二日目の夜の宣誓文作成(翌朝親鸞聖人像御前での宣誓式に班員全員で唱和する文章)で、班員全員の共通の思いをまとめるため多少時間を要したこと

でした。

我が班の宣誓は(一)悲しみ悩み苦しむ私に生きる方向を指示してくださった親鸞聖人の生き方に学びます(二)生きて来た人生と現在の自分を見つめて生き生きと生きていく私にしたい(三)朝夕のお勤めを生活の基本とします。

としました。「宣誓文」の清書の役目を光栄にも引き受けて頂きました。

また、二日目の午後、蓮如上人御影の吉崎御坊(福井県)への御下向式が拝見できて感激しました。

中岡先生の「推進員とは宗祖を持つことである」との言葉が印象的でした。両先生のお言葉及び宣誓を心に刻み、今後の生活に努めたいと思います。

関係者の皆様、前・後期あわせて貴重な六日間有難うございました。

合掌

藤原 自雄

御縁あつて、東京教区推進員後期教習奉仕団の一員として後期教習に参加させて頂きました。教習は四月十六日から十八日までの三日間、真宗本廟で行われました。共に同朋会館に宿泊し、全国各地から参集された奉仕団の方々との交流もあつて、そのような意味でも有意義な時間を

過ごすことができました。

東京教区の後期教習参加者は全員で二十一(内、引率スタッフが六名)でした。光照寺からは四名が参加しました。

京都に向かう新幹線の車中で、『歎異抄』の中にある親鸞聖人に教えを請うため「身命をかえりみずして」上京した方々へ思いを馳せ、少し緊張した心持で京都駅のホームに降りました。

同朋会館の玄関で前期教習(二月二十七日～三月一日)で一緒に過ごした方々と再会いたしました。教習からわずか一カ月半しかたつていないのに、これまで経験したことのない懐かしさや嬉しさが湧いてきて、「同朋」「同行」の意味を肌で感じたように思います。

教習では北海道教区の中岡明秀先生にご指導をうけました。中岡先生の穏やかな語り口で、時にはユーモアを交えながらの分りやすい講義に思わず引き込まれました。常に自己正当性を主張し、自分は間違いないと信じている自分。そうした自分とどう向き合っていくのか……。深く考えさせられました。

二日目の朝、帰敬式をうけました。昨年から自分の心の中で、いずれは「おかみそり」をうけたいと望んでおりましたが、帰敬式に臨んで、改めて、帰敬式をうけるに至らせた自

分を取り巻く大きな流れを思いしました。

「自然というは、自はおのずからという。行者のはからいにあらず、しからしむということばなり。然というはしからしむということば、行者のはからいにあらず、如来のちかいにあるがゆえに……」(末燈鈔)

私に先だつて歩まれた多くの縁ある人々の願いに導かれて、私は今ここにいます。親鸞聖人の御真影を仰ぎながら、そんなことを考えておりました。

最終日の十八日の朝、宣誓式に臨みました。前夜、同じ班の方々と長時間かけて宣誓文を作成しました。宣誓文の内容は、

一、悲しみ、悩み、苦しむ私に、生きる方向を指示して下さい

二、親鸞聖人の生き方に学びます。

一、生きて来た人生と現在の自分を見つめて、生き生きと生きていく私にしたい。

一、朝夕のお勤めを生活の基本とします。

宣誓式の後の中岡先生の最後の講義でこのようなお話がありました。

「生き生きと生きるとは、明るく、楽しく生きるということではありません。現在の自分をしっかりと見据え、たとえ苦でも、それを背負って生きることをいうのです」

先生のこの言葉を肝に銘じて、

「今・此処」を生きて行きたいものだと思います。

解散式の後、希望者のみで御影堂・阿弥陀堂屋根面の見学がありました。普段はありえない高い位置で間近に屋根を見ることができ、匠の技に感動しました。

更に感動したのは工事現場から見える周りの景色でした。京都の町並みと、それを取り囲む山並み……。そして、それらの景色を眺めながら、何とも言えない安らぎと清々しさを感じている自分がいました。

忘れることのない良い思い出になりました。

合掌



蓮如上人御影道中 御下向式

お知らせ

寺務所より

敬弔

●花岡要様(元護持会副会長)、(平成二五年四月四日命終 九三歳)が浄土へ還帰されました。生前のご功労を偲び、念仏合掌して哀悼の意を表します。

法要のご案内

●孟蘭盆会法要 八月十一日(日)、午前・午後の二部厳修。
●秋季彼岸会法要 九月二十三日(月)午後一時三十分より厳修。
●報恩講 十月二十七日(日)午前十一時より厳修。

光照寺護持会総会

六月三十日(日)アトラクションもありです。

光照寺旅行

九月二十八日・二十九日。茨城方面へ一泊を予定しています。

聞法会のお知らせ

●親鸞聖人のみ教えに聞く会

毎月開催。午後一時半～四時半まで。講師は樸曉先生。和讃を学んでいます。日程は寺にお尋ね下さい。

大経の会

七月二十八日、九月一日、十月十四日、午前十時～午後三時まで。細川巖著正信偈讃仰(四)を学んでいます。お弁当持参して下さい。

我聞の会

七月九日、九月十日、十月二十一日、午後二時～四時まで。「真宗の簡

要」、サブテキスト「無量寿經に聞く」を学んでいます。講師は住職。
●微風学舎
毎月開催。午後七時～九時まで。講師は副住職。「顕浄土」の教学、親鸞における現生不退の視座、サブテキスト「今日のこころ」を学んでいます。日程は寺にお尋ね下さい。

さいたま親鸞講座

市民公開講座。午後二時～四時まで。会場は大宮川鍋ビル。八月十七日、十月十二日、十二月十四日、講師は四衢亮氏。

お願い

ご自宅で法事の際は駐車場をご用意下さい。宜しくお願いします。



吉澤 光照

鎮魂の桜の下の大宴 ※靖国神社
花いかに鯉の背に乗り次の宴
形よし名も又宜し桜餅

西木 順子

春りんどう筆りんどうとかがみけり
割れはじむ山しやくやくの花の白
その場所に髭がきらきら翁草
(赤城自然公園の草花より)

山田 恒

汗拭き拭き余生の風に生かされる
喜寿越えて世間漸く見えて来る

釈 義深

願いごと成るか成らぬかは如来意志

大勢の力寄るかも如来意志
夢のごと如来の意志は分らない

短歌(詩)

佐藤 セツ子



こんこんと雪降る町を想うとき鳴き雪の音耳に残れり

鳴き雪 雪道を長靴で歩く時に出る音

春寒き庭にまず咲く満作の花を愛

でおりガラス戸越しに

学寮に枕並べて眠りたる友はもう

亡し傘寿近づく

飛鳥山の空を覆いて咲く桜吉宗公

もまぎれていしか

飛鳥山 徳川八代將軍、の作らせた桜

の山

拾われし日を君は覚えているだろう

うか孫らと暮らす二十才の猫よ

赤秀 品枝

去りし人行方いずこや花ざくら深

き心を我に残せし

連休に川沿い二人でウォーキング

部活のかけ声胸にひびけり

篠原 潤子

腰ベルトビシッとして土をほる

遺跡の発掘ただ土をほる

おさなごが団地ベランダでまねを

するラジオ体操現場の朝なり

ヘルメット軍手長ぐつ作業服古代

の土を掘つてはすてる

ひつそりと現場の片すみタンポポ

がわれに向かつてささやきかける

一輪車山盛りに土をのせておす古

代の時間つまりし土を

梵鐘



山田 邦興 画

私は住職と交代で、大経の会で細川巖述「正信偈讃仰」を頂いている。正信偈は私にとっては朝晩の勤行の時にあげるお聖教の中で最も親しみのあるお聖教である。

正信偈をあげていると若き日の感銘がよみがえる句がある。

「極重悪人唯称仏 我亦在彼撰取中
煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我」
もその一つである。この句は倉田百三著「出家とその弟子」の扉にも書いてあったと思う。

現在は、

「本願名号正定業 至心信樂願為因
成等覺証大涅槃 必至滅度願成就」
の句が心にひびく。先師の最後の講義がこの句だったことにもよるからであらう。

光照寺の聞法会は楽しい。そして懐かしい。集まる方々が率直に自分の思いを出されるからであらう。又長く聞かれた方々が多いこと。寺族総出で出席されること。私はこの会で多くの友を賜った。

(文)